

# CAPNA

## キャプナ★ニュースレター

設立10周年を迎えたCAPNAの本年度定例総会が18日開かれました。岩城正光理事長は、順調な成長を遂げてきた10年を振り返りつつ、新たな10年に向けて組織の社会的責任、使命をかみしめ、虐待防止のネットワークを発展させていくことを誓いました。

続いて、愛・地球博の地球市民村での紙芝居が好評だった「理想のママのつくりかた」の作家・森野さかなさんが記念講演。少女時代の悲しい体験、自分の成長を支えてくれた人々への感謝、子どもたちを守る思い…中身がいっぱい詰まった温かい講演が、場内を感動の渦に包み込みました。(講演要旨は2、3面に)

Vol. 42

### 市民講座 重い現実に、真摯に向かい合って…

6月23日(木)の市民講座は、CAPNA 弁護団の瀧康暢弁護士が、協力している児童相談所がかかわった虐待ケースについて話しました。多重債務に陥り債権者から追い込まれている家庭、親の片方または両方が外国人でオーバーステイの状態にある家庭など普段あまり接することのない事例の中で、最も弱い立場の子どもが虐待される、あるいは国籍のないまま社会からも放置されるなど、深刻な状況が浮き彫りになりました。

また、耳慣れない『引きこもり虐待』では、妊娠中から不安定で出産後引きこもり状態となった母親とその子どものため、各関係機関が連日見守りを続けた話など、その真摯な努力に驚かされました。

瀧弁護士は、保護(子どもを親から奪う)と再統合(家族の再生)という全く正反対の業務を行なっている児相が抱える矛盾点にも言及し、そんな中でわれわれCAPNAのような民間機関のできることは何かをあらためて考えさせられました。

次回は8月25日(木) 女性会館にて午後6:30~8:30まで行ないます

隠岐 美智子さんの「ドメスティックバイオレンス・DV」のお話です。どうぞご参加ください。

### ジャスコの黄色いレシートでCAPNAを応援してください。

CAPNAは、イオン(株)の行う社会貢献活動の一つ「幸せの黄色いレシートキャンペーン」に参加しています。毎月11日の「イオンデー」に発行されるジャスコの黄色いレシートを、各店に設置された専用ボックスに投函していただくと、皆さんのご好意がそのレシート合計額の1%分の商品となってCAPNAに寄付されます。

現在(2005年7月)、CAPNAのボックスは『豊田店』『守山店』『南陽店』『扶桑店』『瀬戸みずの店』『ワンダーシティ店』『イオン熱田店』『マックスバリュ豊田店』『木曾川店』『高橋店』の10店舗に設置されています。お見かけの際は、どうぞご協力ください。

また、レジ袋を断る際にもらえる『買い物袋スタンプカード』(20個押印されたもの)を、サービスカウンターで『イオン黄色いレシートキャンペーン投函カード』と引き換えることもできます。

### ご報告

・『守山店』より5000円分のお茶と2700円分のノートいただきました。  
・『名西店』の閉店に伴い、7000円分の図書券をいただきました。

どうもありがとうございました。

### みなさまからの投稿、お待ちしております

CAPNAへのご意見、ご希望などをどしどしお送り下さい。励ましのお手紙、また、厳しいご意見などどんな事でも結構です。事務局宛にファックス、封書、E-mailをお願いします。

尚、ニュースレター内の投稿コーナー『はあとすていしょん』に掲載させていただくこともございます。ご承知ください。E-mailアドレス: capna@cronos.ocn.ne.jp

ご寄付 次の皆様からご寄付をいただきました。お礼申し上げます。

(6-7月分、順不同、敬称略)

【団体】 中区保育士会

【個人】 広瀬治代、白石淑江、上野美子

他匿名で2名

CAPNAニュースレター42号 (隔月刊26号)

2005年8月5日発行

発行 特定非営利活動法人 子どもの虐待防止ネットワーク・あいち

編集 CAPNA事務局広報チーム

事務局 〒460-0002名古屋市中区丸の内1-4-404 TEL052(232)2880、FAX052(232)2882

# いつも、子どもたちのために



## 森野さかなさん講演より

「いま死ぬのかな…」

私が3歳のとき、母が心不全で亡くなりました。ある朝起きたら、横で亡くなっていたんです。そのとき、父親は恋人のところに泊まっていた、留守でした。まもなく、その恋人が新しいお母さんになり、すぐに妹が生まれました。そして私や兄は虐待を受けるようになりました。

熱いお灸をされたり、布団ですまきにされて息ができなくなったり…。「私はいま死ぬのかな」と思ったことが何度もありました。

ネグレクトもありました。ごはんは1日1食で、おかずはふりかけだけ。皆さんもよくご存じの黄色と緑のふりかけです。もし、メーカーの関係の方がいらっしやると失礼なので商品名は挙げませんが、私はいまだにあのふりかけにトラウマがあって、スーパーで見かけたりすると気分が悪くなるのです。

よく「森野さん、虐待を受けたのにどうしてそんなに明るいですか」って聞かれます。虐待を受けたことは事実ですが、3歳になるまでは愛情をたっ

ぷり受けて育っていたこと、そして、虐待を受けた期間が2年間だけだったので、ダメージが小さかったのだと思います。私が5歳のとき、養子に出される話が持ち上がって、母の実家の両親が「孫と会えなくなる」と、思い切って私を引き取ってくれたのです。

でも、私の兄はずっとその家で過ごしました。兄が大学のころに再会したのですが、兄はだれも信用しない、自分だけのために生きている、変な人間になっていました。でも、人間ってすごいと思います。何歳からでも立ち直れるのだと思います。

兄を支えてくれる女性がいて、結婚し、子どもができたことで兄は劇的に変わりました。

愛情を注ぐことで人間って変わる。愛したり愛されたりすることで、人間って変わるって知りました。今も、とても仲良しの3人家族です。

### たくさんのお母ちゃん

5歳でもらわれて 虐待はストップしました。そのことには心から感謝しています。母の実家も生活

1964年生まれ。武蔵野美術大学卒業。絵本作家、イラストレーター。91年、初個展。主な作品に「親子です」や「幽霊生活」(むし画)、「なつたよん」(オノン)、「以上区 藤葉田所」(日本の妖怪はなし)、「さし絵、あすなろ書房」(「うちのたれだ」)、「岩崎書店」など。

は貧しかったし、おばあちゃんのがんの闘病生活でした。3人で力を合わせて、日々乗り越えてきました。そして地域みんなに支えられ、育てられました。

小学校の運動会するとき、私だけ大応援団なんです。垂れ幕を作られて、すごく恥ずかしかったです。母ちゃんみたいなのがたくさんいました。

その体験を通じて思ったのですが、だれかがだれかのために手を差し伸べる時って、とてもうれしそうなんです。助けられる側だけじゃなくて、助ける側もうれしくて、にこにこしているんです。だから、自分も大きくなったら、だれかに何かをして、自分がうれしいと思うようになりました。そして、私は絵が大好きだから、絵を描くことでだれかの役に立ちたいと思って、1冊、1冊、大事に書いています。

### あなたが悪いんじゃない！

私は、妹の子守をよくしていました。妹を抱きかかえながら「こんなにいい子だから、かわいがられるんだ。私は、かわいがられたいけれど、悪い子だから叱られる」って思っていました。

子どもってそういうふうを感じるんですね。そのときの私のところへ走って行って抱きしめて「あなたが悪いんじゃない」って言ってあげたい。

あなたの体が大きくなったら暴力ふるわれないようになる。自分の足で歩いていける日が来る。がんばろう、勉強もいっぱいしようって言ってあげたい。

いつもいつも子どもたちのために仕事をしていきたいって思っています。

思い出の本が2冊あります。

うち1つは「子どもの権利を買わないで一冊とミーチャのものがたり」(自由国民社・1680円)。児童労働と性的搾取のことをテーマにした本で、ユニセフの活動に具体的に役に立ちたいと思って描きました。

もう一冊はCAPNAが紙芝居にしてくれた「理想のママのつくりかた」(自由国民社・1300円)です。この絵本をつくる作業は、自分のトラウマとの葛藤でした。何度も涙が止まらなくなって、苦しかったです。

書いたきっかけは、私を育ててくれたおじいちゃん、おばあちゃんとの埋められない「世代ギャップ」でした。

中学生のころ部活をやっていたので、土曜日で給食がないと、おばあちゃんがお弁当をつくってくれるのですが、うちのお弁当は何となく茶色いんです。天ぷらの残りとか、ホタルイカとか詰めてたりして、それが嫌で、わざとお弁当を忘れて学校に行ったこともありました。

そうしたら、おばあちゃんがわざわざうちの近所に住む男の子のところに弁当を持っていってくれて、私が朝練を終わって教室に行ったら、その子が「おーい、お前、弁当忘れただろー」って。私、カッとなって「あんたとは絶交よ」って言いました。言われた方は、何が何だか訳が分からなかったでしょうね。

### 理想のママを演じる自分

いま、私が娘につくるお弁当は、必ず赤と緑と黄色が入っていて、キティちゃんのかわいいお弁当箱。デザートも付ける。味じゃなくて、色が問題なんです。

そんなことをしている私は、実は私が持って行きかかったお弁当を娘に持たせているんだ。自分が子どものころに思っていた「理想のママ」をいま自分が演じているんだと気づきました。若いお母さんがほしい、と小さいころ思っていた私は、子どもの1カ月の検診にミニスカートをはいていったりしました。それはちっとも彼女のためじゃない。自分が自分のためにやっているんだと思うんです。

理想のママに育てられなかったから、いまこんなことをしている自分。「理想のママのつくりかた」というお話のイメージが、そこから広がりました。

私が生まれ育った環境は決して理想的ではなかったけれど、いろんなおじいちゃん、おばあちゃんにたまたま巡り会って、幸せを感じられるようになりました。

こんなラッキーがいっぱい落ちこちるような日本になるように、小さなことにみえても、やっていくことが大切なんだと思います。そしてみんなが仲よく生きられる社会、平和な世界が来るというのになと思います。

そのために、いい作品を書いていきたいです。きょうはありがとうございました。